

わたしにまかせて

一宮西部小・2　ながさか　わか

「どうしてなの？」

おばあちゃんが手じゅつと入いんすると聞いて、わたしのむねがドキッとなりました。おばあちゃんは、いつも元気でいっしょにあそんでくれていたからです。そして小さなきからわたしがかぜをひいたりするとおばあちゃんは、すぐにおみまいに来てくれていました。そんなおばあちゃんが入いんすると聞いて、さみしくなりました。心ぱいにもなりました。

「ねえ、わーちゃん、おねがいがあるんだけど…。」

おばあちゃんがそう言いました。

「え、なあに。」

わたしは答えました。おばあちゃんがつづけて言いました。

「入いんの間、じいじに夜、とじまりのチェックの電話をしてくれる？わーちゃんならまかせられるの。おねがいできる？」

わたしは、おばあちゃんに聞かれてすぐに答えました。

「うん、まかせて！わたし、おしごと大好き。」

おばあちゃんの顔が明るくなって、言いました。

「よかった。じゃあ、おねがいね。これであんしん、あんしん。」

わたしも一つしごとができてうれしかったです。

家にかえると、わたしは、おかあさんとじいじにかくにんすることを書き出しました。お母さんが、

「えっと、ガスととじまり、おふろのでんげん、シャッターにせんたく…でOKだよね？」

わたしは聞かれて答えました。

「OKだよ。たぶん…。」

じいじのかくにんリストができました。わたしは、おばあちゃんにも何かしてあげたいと思いました。おばあちゃんが入いん中にさみしくないように、うさぎのぬいぐるみをプレゼントすることにしました。

「でもなにか足りない気がする。」

わたしはそう思い、レジンでおまりのネックレスを作り、うさぎのぬいぐるみにつけました。そしてぬいぐるみに名前をつけました。

「うーん、どうしよう。あつ！そうだリリーにしよう。」

おばあちゃんの家にもつていくと、おばあちゃんはすぐ気に入ってくれました。

つぎの日、入いんの日がやってきました。わたしは、その夜から一週間、毎日電話をしました。夜八時が電話の時間です。

「もしもし、じいじ、いい？」

「はいはい、いいよ。」

「チェックするよ。まずガス。それから、…。」

「はいっ、はいっ、はいっ、できてるよ。しまった、できてないっ！

つぎは？」

「おしまいだよ。おやすみ。」

「はいはい、おやすみね。」

それから一週間たちました。さいごの七日目。

「まい日ありがとう、わーちゃん。」

とおじいちゃんが言ってくれてうれしかったです。

つぎの日、おばあちゃんはリリーをつれてたいいんしてきました。
わたしは、

「おかえり。ぶじにおわってよかったね。」
と言いました。

「うんつ。ばあばもううれしい。おしごとくろうさん！」

わたしは、これからも人のやくに立つしごとをたくさんしたいと
思いました。よろこんでもらえてうれしかったからです。しごとは、
わたしにまかせてください！